

全国大会に行ったらおっぱいを見せてあげると約束した高校野球部女子マネージャーのお話

西岡野学園高校の野球部は、弱小中の弱小だった。

県大会での初戦突破すら、10年近く途絶えている。グラウンドは狭く、ネットは古びて穴が開き、道具も十分に揃わない。部員はわずか10人。3年生は5人だけ。それでも、毎年夏が近づくと「今年こそ」と口にする者もいたが、本気で信じている者はほとんどいなかった。

女子マネージャーであり、部長を務める市川七菜香は、そんな野球部を3年間支えてきた。成績優秀で、面倒見がよく、部員たちからの信頼も厚い。部員の中には、密かに彼女に憧れている者も少なくなかった。特に、彼女の胸元は制服の上からでもはっきりとわかるほど豊満で、練習中にちらりと視線を向ける男子もいた。

ある日の放課後、部室でのミーティング。

七菜香はホワイトボードの前に立ち、部員たちを見渡した。やる気のない表情、欠伸をする者、スマホをいじる者。彼女の眉間に皺が寄る。

「ちゃんと聞いて。あと1ヶ月で初戦だよ。このままではまた初戦負け。私にとっても……最後の夏なんだから」

3年生の坂木が鼻を鳴らした。

「俺らだって真剣だって。でもさ、一生懸命やっつの結果なら仕方ないだろ」

「そう言うのなら、もっと練習に集中してよ！一生懸命さが全然伝わってこない！」

言い合いが始まった。声が上がり、空気が陰悪になる。そのとき、坂木がふと口を開いた。

「じゃあ、もし全国大会に行ったら、七菜香のおっばい見せてくれよ」

部室が一瞬静まり返った。

七菜香の目が大きく見開かれる。

「はあ？何言ってるの??」

「本気だよ。条件つけたらやる気出るだろ」

周囲の部員たちがざわついた。

「それいいな」「絶対無理だろ」と部員たちが言い合う。

七菜香は呆れ果てた顔で彼らを見た。西岡野学園が全国大会など、あり得ない。サッカー日本代表が世界大会で優勝するより現実味がない、と心の中で思った。

それでも、彼女はわずかに唇を噛んだ。

このままやる気のないまま初戦負けするよりは、少しでも彼らが真剣になればいい。初戦さえ勝てれば十分だ。

「……わかった。もし全国大会に行けたら、見せる」

部室が爆発した。

「おおおおっ！！」

「マジかよ！！」

「七菜香のおっぱい見れるぞ！！」

誰かが「結構デカイもんな」と囁き、笑い声が上がる。七菜香は顔を赤くしながらも、呆れたように肩をすくめた。